

27. Genotype 1b型C型慢性肝炎におけるインターフェロン治療効果とNS5A領域アミノ酸配列との関連性

(内科学第4) ○横井正人 古畑総一郎
大塚伸行 額賀春彦 武井伸之 佐藤壽志子
石田久人 比佐哲哉 桜林忍 吉益均
斉藤利彦

【目的】最近, genotype 1b型HCVのNS5AのC末端側のアミノ酸配列と, インターフェロン感受性との関連性が報告されている. そこで今回, C型慢性肝炎におけるインターフェロン治療効果とNS5A領域のアミノ酸配列との関係について検討した.

【対象と方法】natural IFN α , recombinant α 2a, α 2bを24-26週間投与(総投与量480-774MU)された genotype 1b型C型慢性肝炎27例を対象とした. 治療効果判定は, 投与終了時および6ヶ月後のALT正常かつHCV-RNA陰性例を著効例, それ以外を無効例とした. NS5AのC末端側のアミノ酸配列は, 患者血清よりRNAを抽出後, 同領域をRT-nested PCRにて増幅し, direct sequencing法にて決定した. アミノ酸配列(aa2209-2248)が, プロトタイプのgenotype 1b型HCV(HCV-J)と同一であるものをwild type(W群), 1-3個のアミノ酸変異を認めるものをintermediate type(I群), 4個以上のアミノ酸変異を認めるものをmutant type(M群)とした. 血中HCV-RNA量は, branched DNA probe assay法にて測定し, 1.0Meq/ml以上のものを高ウイルス量群, 1.0Meq/ml未満のものを低ウイルス量群とした.

【成績】NS5Aのアミノ酸配列は, W群5例19%, I群16例59%, M群6例22%であった. IFNの治療効果をみると, 低ウイルス量群での著効例は, W群0%(0/2), I群100%(1/1), M群100%(2/2), 高ウイルス量群では, W群0%(0/3), I群0%(0/15), M群50%(2/4)であった. W群, I群では著効例を1例にのみ認めたのに対して, M群では67%(4/6)に著効例を認めた. また高ウイルス量群であっても著効例を認めたのは, M群であった.

【結論】Genotype 1b型HCVのNS5A領域アミノ酸配列は, IFN治療効果と関連性を有する可能性が示唆された.

28. 大腸癌血行転移症例における血小板凝集能および接着因子発現の意義

(八王子・外科学第三) ○尾形高士, 山本啓一郎, 勝又健次, 柴田和成, 村野明彦, 森脇良太, 河崎幹雄, 永川裕一
(八王子・内科学第四) 白鳥泰正
(外科学第三) 小柳泰久

＜目的＞大腸癌血行性転移の機序を解明するため, 血小板凝集能, 及び種々の接着因子発現と, 臨床病理学的所見との関連を検討した.

＜対象と方法＞当センターにて切除された大腸癌で術前に接着分子である intercellular adhesion molecule-1 (以下ICAM-1) と, 血小板凝集能の指標となる 11-dehydroxythromboxaneB2 (以下TXB2) を測定した87例のうち, DukesA, B症例20例と同時期に切除された大腸癌遠隔転移症例15例(転移巣切除症例4例を含む)を対象とし, 血清ICAM-1値, 血清TXB2値, 血清sialyl-Le^a (以下CA19-9) と, 肝転移, 深達度, リンパ管浸潤, 静脈浸潤, リンパ節転移との関連を検討した.

＜結果＞大腸癌肝転移(H3)症例では大腸癌DukesA, B症例に対し有意にICAM-1値が高かった($p<0.05$). またTXB2値, CA19-9値は, 肝転移症例, 静脈浸潤例において有意に上昇していた($p<0.05$).

また, 細胞の基底膜構成成分である laminin についても, 今回の対象例にくわえ大腸癌遠隔転移巣切除例11例について, 原発巣及び転移巣を laminin に対する抗体を用い免疫組織学的染色を行い, それらの発現についても検討した.